

## 平成 29 年度プロジェクト研究実績報告書

<b>【研究課題】</b>	千葉市下田都市農業交流センター（下田農業ふれあい館）を活用した地域活性化に関する研究
<b>【研究代表者】</b>	櫻井 尚子（東京情報大学・教授）
<b>【研究分担者】</b>	柳田 純子（東京情報大学・准教授） 安岡 広志（東京情報大学・准教授） 内田 治（東京情報大学・准教授） 藤原 丈史（東京情報大学・准教授） 担当部局：千葉市経済農政局農政部・農業経営支援課・グリーンビレッジ推進班
<b>【研究報告及び成果の公表等】</b>	
<p>1. 「目的」</p> <p>本学の教育理念に沿って、学生のアイデアを地域社会のなかで具現化することを志向したアクティブラーニング手法の実施を継続して推進した。前年度から引続き、千葉市が所有・運営委託している「下田都市農業交流センター（下田農業ふれあい館）」の活性化に取り組んだ。本年度は、レストラン部門に注目し、開発を続けてきた商品の活用とともに、外食の状況をデータと実際のハードウェア・ソフトウェアから分析し、結果をレストランの中で実際に展開した。</p> <p>2. 「研究課題実施内容」</p> <p>薬膳レストランの集客強化に係るマーケティング対策・有効性の検証</p> <p>柳田・櫻井両研究室の学生が協働し、情報技術や経営学・マーケティング分野の専門知識を活用して、郷土食を提供する薬膳レストラン「滯」の集客強化策を検討した。また安岡研究室の学生が視覚的訴求性に関する試行策を検討した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 基本データに基づき、正確なデータ解析を行い、過去から現在までの状況を把握</li> <li>② 同データの数量化1類分析により、集客要因を抽出</li> <li>③ 近郊の類似他店を訪れ、滯との比較を行った</li> <li>④ オープンキャンパス時に開発商品及び研究成果を提示するとともに、アンケート調査を実施、そのデータを解析</li> <li>⑤ 学祭時に開発商品及び研究成果を提示するとともに、アンケート調査を実施、そのデータを解析</li> <li>⑥ 強化策について集めたデータをもとに討論を継続</li> <li>⑦ 強化策に基づき、滯の壁面やガラス面活用をデザインし、実行。季節性を求めた。</li> <li>⑧ 効果測定のためのデータ解析を実施</li> <li>⑨ 地元で活躍する方々の講演を聴き、QAを通して、生の現状把握に努めた</li> <li>⑩ アクティブラーニング参画学生の専門的・汎用的能力の発揮、成長感および食育の観点から学習の有効性を検証</li> </ol>	

### 3. 「成果」

以下、項目別に記述する。

#### (1) レストランの壁面利用の促進

食事中には壁に貼っているものや窓の外を見る回数が多いが、レストランの壁面は数年にわたって同じものが貼られたままの状態だったため、これを客数を増やす手段に使えないか、について、討議し、マグネットシートを貼ってその上に作品等を展示できるスペースに作り替えた。簡単なマグネットで貼り付けが可能のため、定期的な展示会として利用が促進されることをねらった。

例) 保育所の園児の作品を展示、シニア会の写真作品を展示、イベントのお知らせ等を展示、野菜に関するクイズを展示等

#### (2) レストランのテーブル・椅子配置のデザイン提案と実施

一人で、あるいは二人での利用の場合、受け入れキャパに影響を与えるため、テーブルや椅子の配置を変更した。レストランの実情に合った配置デザインを考え、実施した。

#### (3) レストランのガラス面利用の促進

ガラス面に季節性を持たせるため、クリスマスやお正月、節分のイメージグッズを窓に貼って客の反応を見てもらった。

#### (4) データサイエンスの有効性実証

レストランの基礎データ（来客数、イベント状況、天候、曜日等）を数量化1類を用いて分析し、来客数に寄与する要因を確定させた。この結果をもとに、ハードウェア上の制約があるレストランの中でどのように来客数増加をプランニングするかについて、討議を重ねた。

#### (5) 地域の自然環境とその問題点、地域での諸活動への理解促進

高橋氏、毛見氏の講演をもとに、地域農業が抱える問題点を整理し、課題設定の一つとした。また、近郊のコミュニティ活動内容（四街道市、Y.Y. NOWSON 等）の講演を通して、活性化の具体例に触れ、問題解決策の一つとして討論した。

#### (6) 課題解決型学習効果の検証

2016年度学習事例の検証結果を「地域連携における課題解決型学習の運営改善に関する考察」として論文にまとめた。「学習成果物の質」と「学生の成長感」の2点に焦点を当て、短期・中長期的観点から運営改善に関して考察を加えた。（柳田、「社会環境論究」第10号、pp.75-96、2018）

以下①～⑤に要約を記載する。

①「学習成果物の質」に関して、未着手であった実際の消費者に対する嗜好評価を実施し、その結果と試作段階での想定消費者に対する遡求性評価結果の双方に基づいて遡求性を検証した。双方の評価における高低傾向がほぼ合致したことを確認し、試作段階での高遡求性が販売段階での高遡求性につながり得ることを把握した。

②上記①の検証を踏まえ、中長期的観点からは社会・環境志向のマーケティング概念に照らして学習成果物を捉え、「長期的消費者福祉性」を備えたモノ・サービスを具現化していくことを指摘した。

③「学生の成長感」に関して、前報で提起した仮説を検証した。成長感の自己認知と関連性が見られたのは、学習目的の手段として「意思疎通」や「協働」の経験が機能したこと、および学習目的の特性のひとつとして「困難」を経験したことが挙げられる。

④上記③の検証を踏まえ、中長期的観点からの運営改善として、「意思疎通」や「協働」の経験に先立って構築される「学生ピア間の関係性」の側面を挙げた。「ポスト近代型能力」として例示される「能動性」や「ネットワーク形成力」等に着目し、「意思疎通」や「協業」に対する影響要因の解明につなげる。

⑤上記④に加えて中長期的観点からの運営改善として、「ストレスコントロール」の側面を挙げた。課題解決型学習過程で「仕事の現実に関する情報受信」の機会がどの程度得られたかといった点に着目し、ストレス対処過程を把握することをとおして学習の有効性を高める。

2014-2016年度事例の学習テーマは商品開発に置いていた。2017年度事例の学習テーマは併設レストランの集客力向上策に主軸を移したので、後者に関する検証は稿を改めて論述する。

(7) 視覚的訴求性向上に関する試行

下田都市農業交流センターの主要商品である野菜の食生活上の効能に関して、顧客層に対する視覚的訴求性をいかに向上できるか、安岡研究室の学生がポップデザイン例を複数制作し連携先に提案した。